

特集：ピクトグラムで伝える

ピクトグラム

横田 保生

ピクトグラムは、対象物や概念・状態に関する情報を伝えるために表した簡潔な図形のことである。ピクトグラムは言葉の壁を乗り越えるユニバーサルな性格を持っており、近年の国際化に上手く対応し、日常生活に於いても欠かせないものとなっている。

ピクトグラムを一言で言えば絵文字であるが、絵文字は古代文字の原型となった絵文字の時代と、近代化・国際化に対応するために作られた現代の絵文字がある。この領域にはアイコン、シンボル、サイン、図記号等の様々な領域があり、それぞれに独自の生い立ちを持っている。まずは時代に沿って説明していきたい。

絵文字

人類の作った図像の歴史は3万年前の陰画手像に始まった。そして洞窟の壁画に見られるような絵が形式化して絵文字と呼ばれる書記記号が出てくる。絵文字の多くは対象の外形を図像として表現しているが、言語との関係が不特定な原始的な表記なので未だ文字とは言えない。しかし一方でエジプトのヒエログリフや中国の甲骨文字のように言語（単語）と密接に結びついて表語文字として立派に成立している文字も絵文字と言われてきた。このように古代の絵文字は文字以前の表記と表語機能を有している文字も含めて絵画的表現がされている表記を引くくめて言っている名称である。そしてヒエログリフや甲骨文字などの古代文字は象形を原始形態とし、どれも絵文字から発生していると考えられる。つまり絵文字の歴史は文字よりも早くから始まっている。

甲骨文字は絵文字レベルの字形のまま言語を記録していくが、見た目の形をそのまま写す象形では表現し得ない語は別の文字の音を借りて(借字)表語機能を備えていく。そしてこれらの文字が言語と結びつき、表音機能を備えることで言語の書

記システムが成立する。文字表記では古い言いまわしが残りやすく、文語的表現で行われることが多いが故に口語との乖離が大きくなり、これを是正するために言文一致が行われて口語の書記システムが完成する。文字の発展史は絵文字に始まり口語表記への発展史と言っても過言ではない。また、文字はコミュニケーションを拡大する機能と言語の使用によってアイデンティティを表現し排他的に群を結束させるという相反する機能を両方持つ。近代以前の絵文字も、家を持たない流れ者同士が行く先々での情報交換に使ったホボサイン(Hobo signs)のように限られたコミュニティーの中で仲間へ情報を伝達するための符号は数多く存在してきたと推測できる。しかしそれらは限られた集団で使われたが故に、排他的な性格を持っていたはずだ。

現在ではこのようにして発展した言語は世界に数千種類以上あると言われているが、国を超えて人や情報が行き来する近代では言葉の違いがコミュニケーションのバリアーになってきた。そこでこれを解決すべく絵文字の位置づけは文字から独立した存在へと変化していく。まず1930年代のアイソタイプ開発を経て1960年代のピクトグラム開発時代を迎えることとなる。

アイソタイプ (International System of Typographic Picture Education)

アイソタイプはウィーン生まれの社会経済学者・オットーノイラートによって考案された図像統計 (pictorial statistics, pictograph) をコアにした視覚教育技法体系である。彼は自ら構想し1925年に発足したウィーン社会経済博物館の展示で、従来の文字による説明ではなく視覚的な統計図を多用し対象数量の変化をシンボルの数で表す図像統計の技法で表した。例えば、出生と死亡者数の変化を表す時に、赤ん坊と棺桶のシンボルを